

市立五條文化博物館《ごじょうぼうむ》平成19年度夏季企画展 藤岡家文書からみた近世の村

- 会期 9月2日(日)まで開催中(毎週月曜日休館)
- 場所 市立五條文化博物館3階特別展示室
- 主催 市立五條文化博物館

藤岡家は、江戸時代旧大和国宇智郡近内村(現五條市近内町)の庄屋を務めた家です。また、明治時代には当主が内務官僚として栄達し、各地の官選知事を歴任した一方で、奈良県を代表する文化人として活躍していました。このように藤岡家は、近世から近代への移行期に、名士として地域社会に重要な役割を果たしていました。

近年その旧宅は、登録文化財としてNPOの手により地域文化の拠点としての活用が図られており、邸内に残されている歴史資料、文学資料あるいは民具類の調査・整理がNPOと市立五條文化博物館の共同で進められています。

藤岡家で保存されていた古文書は総点数で1万点近くへのぼり、内容の解明が期待されていますが、今回の企画展では特に興味深いものを展示し、近世の近内村における藤岡家の役割に迫ってみたいと思います。

- 問合せ先 市立五條文化博物館 ☎24・2011



新町と松倉豊後守重政

第5回 きりしたん 「松倉豊後守重政と切支丹禁教令」

前

月号では、元和2(1617)年島原に入った松倉豊後守重政が、7年の歳月をかけて豪壮な島原城と城下町を造営したこと、さらに身分不相応な藩経営が領民に重税を課すことにつながったのではないかと述べました。今回は重政と禁教令のかかわりについて述べます。

元和2年のころは、その4年前に江戸幕府が発した禁教令のために、長崎、島原は混乱の中にあいました。重政が島原に入部するまでのこの地のキリスト教布教の状況について概観しておきましょう。

ポルトガル船が平戸に初めて入港したのは天文19(1550)年とされています。その折、前年7月より鹿児島滞留中であつたイエズス会のフランシスコ・ザビエルが平戸を訪れています。ポルトガル貿易に強い関心を寄せていた大友、大村、有馬らはキリシタン大名となり、その庇護(ひご)のもと、各地に教会が建てられ、信者も急増しました。天正10(1582)年2月には、かの有名な「天正遣欧使節団」が長崎を出発しています。

しかし、九州に出陣した秀吉は、キリスト教が予想外に民衆に深く浸透して、長崎がイエズス会の所領になっていることを知り、天正15(1587)年6月、突如「伴天連(ばてれん)追放令」を発しています。しかし、この時の排除はそれほど厳しいものではなかったようです。

江戸に幕府を開いた徳川家康は、それまでの秀吉がとった威嚇外交の方針を改め、平和外交を進めて、朱印船貿易などで利益を追求する政策をとりました。しかし、有馬晴信が死を賜った慶長17(1612)年の岡本大八事件以降、幕府は禁教令を発しています。急速に増加するキリ

シタン、布教にかこつけたイスパニアなどのカトリック教国の植民地政策に危惧(きぐ)を覚えた幕府が、日本からキリスト教を排除することに決めたのです。慶長18年には全国の大名に通達して、領内の宣教師全員を長崎に送り、教会を破壊し、キリシタンの棄教を命じ、宣教師を国外追放に処しました。

有馬晴信の嫡男直純はその夫人が家康の養女であったこともあり、晴信の遺領を安堵(あんど)され二代目島原藩主となりました。直純は自らも棄教し、さらに領内のキリシタン宗徒を絶滅することを約束、教徒を厳しく取り調べたので犠牲者も多く出ました。また家臣の中からも殉教者が出る有様でした。しかし、同地の改宗はなかなか進まず、幕府は慶長19(1614)年7月有馬直純を日向延岡に移封しています。この移封では多数のキリシタン武士が主君直純に従うことを拒み、旧領に残留して土着したとのことです。

この後、大坂冬の陣、夏の陣を経て、元和2(1617)年4月家康の死後、將軍秀忠は、禁教令をさらに徹底し、同時にイギリス船とオランダ船の着岸を平戸に、ポルトガル船を長崎に制限し、それ以外の地での商取引を一切禁じています。松倉重政が有馬一族の旧領島原に入封することになったのは、禁教令によるキリシタンへの弾圧が吹き荒れていたころであり、外国との貿易も禁教令に伴い厳しくなってきたころでした。しかし、当初、重政がキリシタンを迫害したという史実はあまり出て参りません。彼の興味はもっぱら城造りであり、城下町の整備であったのではないかと推察されます。

(参考文献：長崎県史編集委員会編集「長崎県史」)

(新町と松倉豊後守重政400年記念事業実行委員会委員長 榎野久春)